

# ティーチングポートフォリオ



佐賀大学文化教育学部

角 和博

## 目次

1	教育の責任	1
2	教育の理念	2
3	教育の方法	2
4	授業の評価	4
5	地域における教育活動	4
6	学習の成果	5
7	教育の改善	6
8	今後の目標	6
9	添付書類	7
	(1) 文化教育学部 履修の手引き 2009年度版	
	(2) 佐賀大学短期留学プログラム時間割 2008年度・2009年度版	
	(3) 教員免許更新制講習会資料 2009年度版	
	(4) 「情報基礎概論」演習プリント(進数の数え方) 2008年度	
	(5) 「情報基礎概論」演習プリント(アセンブリ的な考え方) 2008年度	
	(6) 「情報科教育法」教科書4ページ(動物あてクイズ) 2008年度	
	(7) Kodomo2.0 ホームページ <a href="http://kodomo2.0saga.net/">http://kodomo2.0saga.net/</a>	
	(8) 平成20年度佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センター紀要	
	(9) 高等教育開発センター年報 2006	
	(10) 高等教育開発センター年報 2007	
	(11) 「情報基礎概論」授業カード 2009	

## 1 教育の責任

1981年に佐賀大学教育学部の助手として技術科教育法を担当してからすでに28年の教員生活を送っている。この間に文化教育学部になり、現在は小学校課程の学生を指導している。

現在、教養教育、学部および大学院で17科目の授業を担当している。「人間社会とコミュニケーション」は教養教育の全学部対象の選択科目であり、完全なフル e ラーニングである。「情報基礎概論」は、教養教育で必修の情報処理科目で学校教育課程の1年生全員（約100人程度）が受けている。人数が多くても授業では毎回学生に課題を出して演習作業をさせ、課題を提出させている。

専門の科目は、指導担当分野である情報技術教育分野の学生には必修であるが、実際には小学校の科目にはない中学校技術科の免許科目が大半である。このため教師教育の視点を含んだ授業内容にするように工夫している。たとえば専門分野の用語をより基本的な概念から捉え直すようにしている。このことで小学校教員となった場合には、技術や情報をより基本的な視点から捉える考え方を身に付けさせようとしている。これ以外にも今年GPを獲得したデジタル表現技術教育プログラムの授業や、数年前から実施している1年間の短期留学生のためのプログラム、さらに今年から実施された教員免許更新制講習などを担当している（添付資料 1,2,3 参照）。

### 平成21年度 角 和博の担当科目

部 局 名	科 目 名	備 考
教養教育科目	人間社会とコミュニケーション	選択、フルオンライン学習 150名
	情報基礎概論論	学校教育課程必修 96名
	インストラクショナル・デザイン	デジタル表現技術教育 未定
学部専門科目（技術科免許科目を含む）	専門教育外国語Ⅱ	選修必修 2名
	教科教育情報論	選修必修 47名
	ヒューマンエレクトロニクスⅠ	分野選択必修・技術科免許 4名
	生活環境電磁気学	分野選択必修・技術科免許 4名
	プログラミング演習Ⅱ	技術科免許 未定
	電気基礎実習	技術科免許 未定
	情報技術教育課題研究	分野選択必修 未定
技術科・情報科の免許科目	技術教育学	技術科 4名
	技術科教育法Ⅱ	技術科 4名
	情報科教育法Ⅰ	技術科 17名
	情報メディア論	情報科 2名
大学院（教育学研究科）科目	技術教育特論	必修 0名
	実践授業研究	必修 0名
	課題研究	必修・修士論文指導 1名

佐賀大学短期留学プログラム (SPACE)	Web Creating in Japan	選択	2名
	Web Developing in Japan	選択	2名

教員免許更新制講習	教育情報コミュニケーション	小中高全科対象	54名
-----------	---------------	---------	-----

## 2 教育の理念

学びの主体は学生であり、教師の仕事は学びの環境づくりである。学びとは避けて通れない状況に自分を置き、問題を解決することである。したがって私の仕事は学生に避けて通れない状況をつくることであると考えている。

作物の生育にたとえば、私の仕事は土づくりと水まきである。育つのは作物自身なのだから、私はその成長を見守るだけである。しかし作物の生長は、決定的に土づくりと水まきで異なってくる。もちろん太陽光は、もっとも重要な条件ではあるが、それはコントロールできない。それはさまざまな問題で困難な状況にある学生の環境を変えることができないことと似ている。このような場合私は学生からの相談に耳を傾けるようにしている。その対話のなかから学生は自分自身のあり方を問い直す機会となることがある。

学生が自己教育力を向上するためには、生涯設計のなかでの現在の位置づけを明確にすることが重要であることに気づかせる必要がある。そのためには、今なぜ何を学ぶのかということについて、自分なりに意味づけをもたせる必要がある。人生の選択は多様性に満ちており、諸条件の中で自分自身の答えを見つけることが重要であることに気づかせたい。

そのため実際の授業では、学生にテストの正答率の高さなどの直接の教育目標をあまり要求していない。その学生が卒業して社会で活躍するようになってからの仕事の内容や職場の人間関係における姿勢や態度が形成できるように、現段階ではその学生が何を学び、何を考えることが必要かを間接的目標として設定している。あえていえば実際の授業の直接目標は学生の自己教育力を育てることであるといえる。

授業は、教師と学生の相互作用の場という教育環境のひとつである。授業を受けているあるひとりの学生に着目すると、その学生は教師や周囲の学生からさまざまな刺激を受け、新たな思考をはぐくむであろう。この場合も成長するのは学生自身である。ただし教師も周囲の学生もともに成長する。

## 3 教育の方法

学生が授業の主体であるという姿勢は、教員に要求されるものである。授業の構成をこの考え方で構成することで授業全体の環境を整えることができる。

### 3.1 授業には常に演習を入れ、学生の作業活動の時間を設定している。

情報基礎概論の時間では、2進数から20進数までの数の並びをそれぞれ表の各列に書かせるものであるとか、簡単な四則演算についてアセンブリ的な考え方を文章で書かせるものとか

を提示している。情報科教育法では授業の初めの方で「動物あてクイズ」を学生同士で行わせることで情報伝達の難しさを体験させている。このような体験は、学生の記憶に長く残り影響を与えていることが4年生と話したりするときわかる(添付資料 4,5,6 参照)。

- 3.2 学生への質問や演習課題のトピックスは、常識とは異なるものの見方や考え方を提示することで、学生に新しい視点をもたせようと工夫している。

「窓ガラスは光を通すか」とか、「新訳聖書にある『パンの奇蹟』のパンとは何か」という質問などである。これらは常識とは違うとらえ方をすることで、物事を本質から問い直すきっかけづくりにもなっている ((添付資料 7,8 参照)。

- 3.3 学生には自分で問題を発見し、自分で問題を解決する力を身につけさせたいと考えている。

私が提示するさまざまな課題や質問には、明確な答えがないものが多い。さまざまな状況の中でさまざまな答えがあるものを提示する。このことで高校までの問題と解答が一对一の関係である考え方にゆさぶりをかける (添付資料 7,8 参照)。

- 3.4 ICTを活用したeラーニングは、自己学習力を促進する効果があると考えている。

eラーニングは自分でログインするところから始まる。学生は自分で決めたスケジュールで、授業を受けることができ、わからない部分はフォーラムやメールの機能を使って教員に質問できる。

しかし、一般にeラーニングは教師に置き換わるもの、いわば教師ロボットのようなものとして捉えられてしまう危険性がある。たしかにオンラインでビデオやスライドが流れ、小テストも自動採点であれば教員が直接授業にかかわらなくても、最後の定期試験の採点だけで評価が可能である。このためeラーニングでは自分の考える教育はできないとして放棄したり、参加を拒否する教員もいるぐらいである。

私は、むしろオンラインコンテンツをいろいろな形で活用している。対面の一斉授業で受講生といっしょに自分のeラーニングを見ながら途中で止めて補足説明を加えたり、受講生に質問したりする。まるで放送教育の活用であるが、基本的に違っているところは自分が作成したコンテンツであるということである。自分で自分の授業(バーチャルなメイン教員)を見ながら、それにコメントを加えるリアルなサブ教員としての自分がいるということになる。教員は、授業ではある決まり切った教育内容を説明するためにしゃべりや板書に労力を使う。その分はビデオに収録した映像や音声ですませれば、その分だけもっと受講生のニーズにあったタイムリーなコメントをだす余裕ができる。

対面式の授業では、数人の大学教員等の共著で作成した教科書を学生に購入させ、このテキストの中からeラーニング上で課題を出させている。学生はeラーニング上で解答する。このため学生は紙に印刷してレポートを提出する必要がない。また教員はオンライン上で学生のレポートを読むことができ、出席もリアルタイムに取ることができ、それらの記録も保存されている。学期末の成績提出は、これらの課題の採点と同時に平均点が表示され、それを教務のオンラインシステムに転記して送信することで完了する。

#### 4. 授業の評価

授業を教員と学生または学生同士の相互作用であると捉えれば、授業の評価もまた教員と学生または学生同士の相互作用を反映するものであると考えられる。

教員がスタジオで収録した映像や音声とスライドを連動させたフルオンライン学習（佐賀大学ではネット授業と称している）は、一度作成すると、その後に担当の教員がかかわることはほとんどなくなる。定期試験の記述式問題の採点ぐらいである。このため授業のしていないのと同じであると考えて、継続を断ってネット授業の参加をやめた教員もいる。たしか対面授業と異なり、放送大学のビデオ教材学習と同じであるという見方もできる。しかし実際に半期で150名もの学生が受講し、その約80%が単位を取得していることも事実であり、学生の授業評価に悪い結果はでていない（添付資料 9参照）。

情報基礎概論は100名近い学生が受講している。本当はパソコン演習室を使いたいところであるが、他の授業と重なって使用できない。このためeラーニングの機能を使って対面授業を行うことができない。eラーニングの課題提出は授業以外で行うことになり、授業中に出した課題の提出や授業の予習・復習用に使っている。対面授業ではA6サイズにフォーマットを印刷した用紙を学生に配布し回収して出席と授業のフィードバックに用いている。項目は学生番号と氏名、今日の授業のまとめ、感想、質問などであり、これらは学習評価にも利用している。この方法は授業のフィードバックには最適で、学生のさまざまな授業への意見を知ることができ、重要であると思われる質問には、次回の授業の始めに回答をしている。

#### 5. 地域における教育活動

##### 5.1 Kodomo2.0

2009年8月17日から市民活動の一環としてとしてNPO法人「ITサポートさが」の理事長を努めている。これは2008年1月から子どもをネット犯罪から守る市民活動として「Kodomo2.0」を始めた結果、1年間でNPO法人を取得するまでに成長したものである。現在、理事長を努めている理由は、単に「Kodomo2.0」の代表を務めていたというからではない。最大の理由は卒業研究の学生が研究テーマとして子どもの情報モラル教育を選んでいったことにある。

振り返るとここ数年間かならず情報モラルをテーマにする卒業研究の学生がいたが、付属小学校や県内の小学校での実践をまとめたものが多かった。それらも貴重な卒業研究であったが、今回の市民活動との関わりをテーマにした卒業研究で私が感激したことは、2人の学生の成長であった。大学の授業や教育実習とは異なり、学生たちが小学校の先生方を含む一般市民との協働作業の中で、自ら活動の中心となり、活動全体を動かしていったのである。

毎週金曜日の午後7時から午後10時までの例会と月に1度か2度にわたる講演会をやり遂げ、なおかつ現役で2人とも教員採用に合格し、4月から教壇に立っているのである。

一般人でも難しいとされる市民活動の運営をリードしていった学生たちは、1年間で明らかに成

長していた。研究室にレポートを書くことでは得られない貴重な体験を経て、自分自身の生き方に自信を得たようであった（添付資料 10,11 参照）。

## 5.2 佐賀大学ふるさと映像塾

佐賀県は、平成 16（2004）年度から佐賀県内のデジタル産業を活性化するためのアジアのハリウッド構想を打ち出した。これを受けて佐賀大学は、佐賀県との協力協定を結び、佐賀県からの受託研究を得て映像関連講座を開設した。このため黒澤明の映画研究であり、また一般人に映画の撮り方を広めている佐賀市在住の西村雄一郎氏が、教養教育科目として、現在数科目の映像関連科目を担当している。これをもとに佐賀大学は昨年より教育GPを取得し「デジタル表現技術教育コース」を立ち上げた。これらの講義とは別に実践活動として映像制作のための市民ボランティア団体「佐賀大学ふるさと映像塾」を立ち上げた。私は副塾長として事務局を運営している。これまで4年間で佐賀県の依頼で3本のプロモーションや啓発ビデオを作成し、さがテレビで放送するための佐賀大学のCMを1本作成してきた。また「百人の応援メッセージ」（J2 さが鳥栖のホームでの試合中に撮影して公式ホームページの動画サイトに掲載をつづけた）は、2年間で70回を超えた。

昨年度大学院を修了した院生は、学部生のときからこれらの活動に参加し、修士論文では、学校教育におけるビデオ学習カリキュラムの体系化をテーマに、公立中学校技術科の非常勤講師として実践授業を展開し、修士論文を作成した。

この佐賀大学ふるさと映像塾の活動には、佐賀大学のさまざまな学生を巻き込み今も展開をつづけている（添付資料 12 参照）。

## 5.3 佐賀大学公開講座

佐賀大学公開講座でコミュニケーションセミナーは、10年以上担当している。6年前からフリーアナウンサーと講座を分担している。またデジタル表現技術教育プログラムを担当している2人の学外非常勤講師は写真撮影セミナーや映画で学ぶ人間学などの一般市民向けに公開講座も担当しており、私は講座のコーディネーターを担当している（資料添付 13 参照）。

平成 21 年度 佐賀大学公開講座

講座の分担	コミュニケーションセミナー入門編	6/30 時間担当	17 名
	コミュニケーションセミナー応用編	15/30 時間担当	15 名
講座のコーディネイト	写真撮影セミナー	講座の運営	18 名
	映画で学ぶ人間学	講座の運営	未定
	ビデオ制作セミナー	講座の運営	未定

## 6. 学習の成果

数人の学生を対象とした授業では、常に学生と対話しながら授業を進めているので、授業に対する学生の評価は直接伝わってくる。たとえば学生から授業の進め方について要望が出たりする。それを学生全員で話し合っって授業の方向を決めたりしている。授業は学生のためにあるという視点から、学生にとって何が必要かを常に考えながら 90 分の授業展開を考えている。たとえば技術科教育法の授業をしていて、3年生から採用試験の問題にどう取り組むかという相談があれば、授業以外にゼミの時間をつくって試験問題をいっしょに解いて関連問題を検討するなどを行っている。

また教育実習の大学側の取り組みとして、指導学生が割り振られているが、実習の事前指導から実習中の指導案作成や教材作成などにかかわるようにしている。これによって学生との信頼関係を強くすることができるようである。

では各授業は始まりと終わりでは学生はどのように変化したであろうか。それが明確にわかる授業は、情報基礎概論の授業で配布し回収している A 6 サイズの授業カードである。その授業中に学生が感じたことや質問や疑問などを書かれているが、今日の授業は「おもしろかった」とか「目からうろこが落ちるようだった」という言葉も書かれている。なお授業で各自に演習プリントを配布するときには、感想はプリント内にも書いてもらっている（添付資料 14 参照）。

## 7. 教育の改善

e ラーニングを導入する前と導入後で対面式の私の授業は、つぎのように変わった。

- (1) 授業は学生の作業を中心に展開し、課題提出は e ラーニングで行うようになった。このため従来までの紙媒体のレポートの保存・管理の必要がなくなり、採点も簡単で正確になった。
- (2) 急な出張などでもフォームの中に e ラーニングの課題を済ませるように伝言を書き込むだけで、いつでもどこでも学生に連絡が可能である。これをレポートとして取り扱うことができるので、突然の休講などがなくなり、学生との信頼関係を保つことができる。
- (3) e ラーニングは学生に教材を提供しやすい。PDF など自由に教材を提示できる。従来紙媒体で配布していたことと比較すれば、時間と資源の節約は計り知れない。実際に 100 近い授業でひとり数枚の紙を配布するためには、原稿の印刷にはじまり、輪転機操作による人数分の印刷、教室での配布などの手間がかかる。最近授業ではテキストだけをもっていくスタイルが増えてきた。教材はあらかじめコンテンツ化しており、出席も評価もオンラインで行うため、手ぶらでいく授業もある。

e ラーニングを活用した学習では、つぎのような効果がある。まずフルオンライン学習（ビデオ・スライド配信、小テストの自動採点）の人間社会とコミュニケーションでは、約 150 名の学生が前期と後期にそれぞれ受講し 80%以上の学生が単位を取得できている。この科目が e ラーニング科目として発足した当初は 50%程度であった学生の単位取得率がここまで向上した要因には、e ラーニングスタジオのスタッフのサポートや大学院生の TA サポート体制、コンテンツ配信の向上、小テストによる自動採点等、さまざまな工夫によるものであり、現在これらのオンライン学習の教養教



育科目は、学生の単位取得に大きく貢献している。

## 8. 今後の目標

教員として担当する科目が多いことは、個々の科目の授業の質を低下させることにつながることは自明である。このために教育の効率化を図る必要があり、eラーニングの導入は、その模索の結果でもある。実際に対面式の授業にeラーニングを導入すれば紙媒体による配布や回収、並べ替えや集計などの膨大な時間を要する作業は瞬時に終わる。また転記の際に生じる誤記入や見落としなどはなくなる。教員は労力を軽減できるし、学生は教員の評定ミスに対する不安を軽減できるし評定プロセスの確認もできる。

佐賀大学では、eラーニングのシステムがほぼ完備されているが実際の使用率は数%程度である。たしかに科目数は24科目ではあるが、修得単位数は年間で1200単位程度とかなりの効果をあげている。しかし現段階で全教員が全科目で導入すれば、サーバー運用の許容範囲を超えることは分かり切っている。総合情報基盤センターとの連携が重要である。eラーニングスタジオの仕事は、フルオンライン学習用のビデオやスライドの作成が中心である。これにサーバー管理も加わっていつもオーバーワークな状態にある。

昨年から教育理事のもとに佐賀大学ICT活用推進委員会ができた。この委員会で総合情報基盤センターとeラーニングスタジオの業務連携が図れるようになることを期待している。

## 9. 添付書類

- (1) 文化教育学部 履修の手引き 2009年度版
- (2) 佐賀大学短期留学プログラム時間割 2008年度・2009年度版
- (3) 教員免許更新制講習会資料 2009年度版
- (4) 「情報基礎概論」演習プリント（進数の数え方）2008年度
- (5) 「情報基礎概論」演習プリント（アセンブリ的な考え方）2009/年度
- (6) 「情報科教育法」教科書4ページ（動物あてクイズ）2009/年度
- (7) 「情報基礎概論」板書クイズ「窓ガラスは光を通すか」2009/年度
- (8) 「情報基礎概論」授業カード「パンの奇蹟のパンは何か」2009/年度
- (9) 授業評価「人間社会とコミュニケーション」2009年度
- (10) Kodomo2.0 ホームページ <http://kodomo2.0saga.net/>
- (11) 平成20年度佐賀大学文化教育学部附属教育実践総合センター紀要
- (12) 高等教育開発センター年報 2006
- (13) 高等教育開発センター年報 2007
- (14) 「情報基礎概論」授業カード 2009